



限定本の行方

胡桃割り館蔵書

ある物は愛され

ある物は閉じ込められ

ある物は読まれ、使われ、汚れ

ある物は、飽きられ、捨てられ

ある物は、理解なき相続人に捨てられたり

ある物は、その存在を忘れられ、風化していったり

ある物は、悪意あるものに燃やされたり

そんなふうに一冊、また一冊と消えてゆく

最後に本がたどりつくのは・・・物的的消滅。データだけが複写され、別の物体に移動させられて、後世へと残ることもある。

古代羅氏の限定本が配布された。限定〇〇冊、総革表紙、ビロード函入、著者直筆サイン入り、限定番号記入がなされた版画挿絵付きの本である。幻のデビュー前に書かれた小品がおまけとして収録されている。

それは氏のデビュー作でもなく、代表作でもなく、受賞作でもなければ、受賞候補作ですらなかったが、ファンの間では1、2を争うほどの人気の高い作品であった。文壇は評価しなかったが、氏の元へはもう発表されてから十年以上経つというのに、熱烈なファンレターが届くのだと言う。

彼は初版本コレクターだった。とくにこの作家のものは、収集範囲に含まれていたから、なんとしてでも入手したかった。

だから、発売情報と共に本屋に注文をした。もちろん、収集する本は完璧にきれいなものが欲しかったから、いつも通り、念のために保存用と予備の二冊を注文しておいた。

発売日になり、無事に入手した本は、彼の期待通りの刷りあがりのうつくしい限定本だった。

家に持って帰った限定本は、さっそく二冊とも薄い和紙に丁寧にくるまれ、さらにビニールで密封され、封印された。

これで湿気や虫に痛めつけられることもないだろう。

彼は安心し、二冊の本を鍵付きの硝子戸式本棚へとしまいこんだ。

（限定本・コレクター）

限定本コレクター（収集家）の元に來た限定本。

限定本コレクターたちは、限定本を手に入れたはいいが、満足し本棚に押し込んで忘れてしまう。

埃によって、限定本のビロードの美しい色は失われ、しなやかな手触りは糊で固めたかのようなゴワゴワとした手触りと化し、湿気と埃と油が混ざり合い、どろどろとした粘りけを持つ物体で次第におおわれてゆく。

限定番号 ○○番

コレクター（収集者）にとって、重要なのは、限定本と言う印と、その物の所有それ自体なのだから、本の美しさはほとんど考慮されなかった。

本など読めればよい。

それが彼の考え方だった。

どうしても、古代羅氏の作品が読みたかった。憑かれたようなその衝動を抑えることはできなかった。

だから目録で、その本の存在を知った時、どうしても手に入れずにはいられなかったのだ。いくら高くてもかまいはしない。

幻の小品だって？ 彼の新作が読めるのならば、何が何でも手に入れなければ。図書館に入庫されるのを、待ってなんかられない。第一、限定本では図書館も入庫しないだろう。

何が何でも手に入れるぞ。

彼の決意は固かった。

その作品が好きでたまらなかった。それなのに本は、文庫しかない。手軽でしかもこの文庫で氏の本に出会えたのだから感謝している。けれど、保存には向かない。すぐに紙が茶色く変色してしまう。文字も小さいし・・・

どうしても読みやすい、保存の利くハードカバー版が欲しかった。だから古本なんて買ったことも、店に足を踏み入れたことすらなかったが、その情報を聞いた時、その値段の高さにも関わらず、そして古本にも関わらず買ってしまった。

古書店から届いた本は、思ったような汚い本ではなく、それどころか新品同様であり、彼は満足した。

読んで読み心地を確かめて見る。

快適だ。

これで何度でも読めるぞ。

心から満足感に満たされ、彼は一文字一文字を、一行一行を、一ページ一ページを、なめるように夢中で読み進めていった。

やがて少しずつ、美しい限定本は、手垢で汚れていった。持ち主は本を大切に扱ったが、何しろ何十何百回と読むのだからしかたがないことだろう。愛されている作品なのだ。

もう何年も新作が出ていないのが不満だった。

もう何度、同じ本を読み尽くしたとか・・・

彼女は、うんざりした。そして落胆した。新作を出してくれない作者に。

もう文庫でも単行本でも、ノベルス版でも読んでしまった。新作が出ないせいだ。

とうとう・・・限定本版か？

限定本など高価なだけだ。彼女には、まったく興味の対象外だった、その本の存在に眉をひそめた。

しかし、駅前の古本屋にうやうやしく飾られているのを発見してから、なぜか落ち着かないのだった。

新作さえ発表されれば、まったく相手にしないであろう存在なのだが、飢えている彼女の頭からは、どうしても離れてくれないのだった。

文庫でも読んだ。単行本版でも読んだ。ノベルス版でも読んだ。ハードカバー版までも入手して読んだ。

それでも新刊が出ない。

そして限定本版が、駅前の古本屋には存在している。

もう我慢も限界だ。

彼女は鞆に財布を投げ込むと、駅前の古本屋へと向かった。

買うと決めれば、すがすがしく気分は晴れていた。あの限定本を手に入れば、また新しい気持ちで、作者の作品を楽しめるのだから。

彼女は、本はきれいでなければ我慢のならないたちだった。

本屋では、いつも本の表紙、背の上下部分、そしてカバァを外して本体の様子も、必ず確かめてから購入していた。

それなのに、死んだ父親の書庫の本と言ったら、どれもこれも読むときに、書き込みはするは、ページは折るは、カバーは破るは、本を日向に置いて日焼けはさせるは、食べ物を食べながら本を読んで汚すはで、まったく持って父親が読み終えた本は、彼女に言わせればゴミ同然だった。

こんなに汚れてしまっていては、古本屋も引き取らないだろう。

持って行くだけ、重い苦勞を味わうだけだ。

やれやれ、とため息をつく。

まあ、しかたがない。まとめて廃品回収か、資源ゴミの日に捨ててしまおう。

方針が決まると、彼女は手近にある本から順番に数冊ずつ積み上げ、紐で縛っていった。その本の山の中に、稀少な限定本があるかどうかと言うことは、彼女の注意を引きはしなかった。

あの作者の限定本が発売されると聞いた。

憎たらしかった。

どうしてだか認めてはいなかったが、いらついていた。その名前を見るだけで。

わかっていた。

貶してはいたが、その鬼才、奇才。どうあがいても手に入れることはできない文章。

デビューの時から気に障った。

奴の本をすべて抹殺したかった。だが図書館にも収まっているし、世の中に何万冊と出版されているし、どうしようもない。後世に残ってしまうかと思うと、焦りを感じてしょうがなかった

。

奴の作品が世に姿をあらわしたと言う情報を得るたびに、飛びついて手に入れた。

そうして手に入れた本を、一ページずつ破き、燃やしてゆく。

少しでも、あの作者が書いた本を、この世から消滅させる。その作業に没頭していた。

今度は限定本だと？　○○冊限定だという。

それならば、手に入れられるだけ手に入れよう。この世から、ほぼ抹殺してやろう。

頭の隅で、いつも気になっている本がある。

作者が好きで手に入れた限定本。

けれど、もう飽きてしまった。今は、他の作家の本ばかり読んでいる。本も増えすぎているし、いいかげんに売り払って、お金に換えたいところだけれど、なかなか、踏ん切りがつかないまま、もう何年も書棚の隅に存在している。

もう読まないけれど、でも、高かったし。

限定本だから、そのうちに価値が上がるかも知れない。

毎回、そう思っている。

だから、一応、取っておくことにしよう。

そして、毎回、同じ結論だ。

書棚は、そんな本でいっぱいだ。床にまで本が乱雑に積み上げられている。けれど、もう少しだけ置いておいてみよう。

価値が出るかもしれないから。

本の形だけは立派だけれど、全然知らない作者名だ。

これは売れそうにないなあ。

古書店の店員は、その外見だけは立派だけれども、お客さんがすぐにはくれそうにない本を手にして、顔をしかめた。

こういう本は、いったいいつになったら売れるのか、さっぱり検討もつかないんだよな。はっきり言って古本屋にとっては、歓迎しないたぐいの本だ。

店員は、店の扉を開け、表に出ると、雨ざらしになっている店の外にある書棚に、その本を押し込んだ。

書棚の上には、一冊十円と、手書きの文字が書かれた紙が貼られていた。

ああ、これは・・・

古書店の店主は、お客さんから見積もりを頼まれた本の山を調べている時に、その本に気づいた。

これは、限定本じゃないか。〇〇冊限定の。

これは珍しい物が来たものだ。たしか作者は数年前に亡くなったはずだが。熱心なファンが多い著者だったから、この本を欲しがる人も、そのうちにあらわれるかも知れないな。

そう思った店主は、限定本を持ったまま立ち上がると、店の奥の限定本・稀覯本のコーナーへと本を持って行った。

誰も迎えに来ないかも知れないけれど、とりあえずは、うちの書棚で休んでいるといいさ。

店主は手元の限定本に、心の中でそう言葉をかけた。

ちゃんと全国の古書愛好家たちの間に、おまえの情報を流して、おまえを迎えに来てくれる人が、おまえの元に来られるようにしてやるからな。

店主は、まるで限定本に結婚相手を探してやるかのような口調で本に話しかけながら、手元のノートに限定本の情報を書き込んだ。

次に発行する古書店目録に載せるために。

木製の愛用机の上に、一冊の限定本が置かれている。

この作者のものは、好きなのだ。作者を知ったのが、作者が死んでしまった後だったから、いろいろと本を手に入れるのに苦労した。

全国の古本屋に問い合わせ、作者の本を一冊ずつ手に入れてきた。

机の上に置かれた限定本も、そうして苦労して、やっと手に入れた一冊だった。

どういう経緯で我が元にたどりついたのか・・・

やっと手に入れた限定本。

今も私の傍らで、人知れず存在している。

終わり